

○農業に光を！

北海道の産業基盤は農業などの1次産業である。しかし、貿易自由化などによりそれが大きく揺らいでいた。農家の皆さんに何か少しでも自信を持ってもらうことができないかと考えて取り組んだのが、地域で培われてきた技術を国際協力に活用することが意図されているJICAの「草の根技術協力事業（地域提案型）」であった。幸い滝川には全国的にも珍しく北海道立花・野菜技術センター、北海道立遺伝資源センター（当時）、ホクレン滝川種苗生産センターなどの試験研究機関が複数あり、また非常に協力的な農業改良普及センター、JAたきかわ、農産品加工団体、そして農家の皆さんがいた。

○マラウイ？

国際協力のイロハもわからない中、アフリカ・マラウイ共和国からの農業技術研修員1名を2000年6月に受け入れることになった。関係機関の皆様は、先端技術の研究をされていることから国際性も豊かで、ご多忙にも関わらず前向きに受入に取り組んで頂いた。一方、農家の皆さんは「そんな人達に教えることはない」、「できない」など当初は否定的であったが、北海道指導農業士などの立場にある篤農家の皆さんの積極的な取り組みが呼び水となり、徐々に広がりを見せ、「うちでも研修受け入れてもいいよ」、「うちはどうか？」など声がかかるようになった。これも偏に中心となって動いてくれた方達、そして最初に来てくれたマラウイ研修員の明るく陽気な人柄による所が大きい。



第1回派遣のマラウイ調査団

○マラウイを見ないと指導できない！

受入が順調に進む中、農家の皆さんから「マラウイとはどんな所なのか?」、「研修員からは聞いているが、現地の状況をこの眼で見ないといかん」という声があがり、2003年1月調査団を派遣。2004年1月に農家の皆さんに「草の根技術協力事業農業技術専門家」として現地に飛んでもらい、1ヶ月間技術指導をしてもらった。一気にマラウイファンが増えていった。



農家さん宅の餅まきに参加するマラウイ研修員

○私達も見てみたい！

マラウイ研修員の受入は、様々な波及効果を生んだ。最初は恐る恐るだった子供達が、学校訪問回数を重ねる毎に、自然な受入となった。お祭りなどに参加することにより「また、来ているんだね」と、年中行事になっていった。JETプログラムなどで滝川に勤務する青年達は「滝川は居心地がいい」と言う。それは、「ジロジロ見られないから」だそうだ。滝川よりも大都市であっても、スーパーなどで買い物をしているじっと見られている感覚がよくあるという。

そんな中、国際交流協会の会員を主体として、そんなマラウイを見てみたいという声が高まり「アフリカ・マラウイを知るスタディーツアー」を2004年1月初めて実施した。

○マラウイから広がる世界

スタディーツアー、専門家の派遣が高じて国際協力に積極的に取り組もうとする「滝川マラウイクラブ」が結成された。現在、会員は40名を越える。残念ながら、マラウイからの農業技術研修員の受入は2008年が最後となったが、合計27名を受け入れた。しかし、スタディーツアーは今も続いている。また、皆さんの口から出るのは必ず「マラウイの〇〇さんはどうしているかねえ、」である。

マラウイ研修員を受け入れて以来、ブータン農業技術研修員、エチオピア水道技術研修員、中小企

業、農村振興、理数科教員、初等教育教員など多種多様な分野に広がり、平成12年以降の研修員受入はすでに400人を越える。

○「国際協力」は人のためならず

今年度は協会が、「ベトナム・カンボジアスタディーツアー」を実施した。下は16歳の滝川高校生、上は74歳の滝川マラウイクラブ会員。市内外の多様な住民を巻き込んで、新風が起こる。さらに、アジア初の難病を抱える子供達の自然体験施設「そらぷちキッズキャンプ」も平成24年度にグランドオープンを控えている。

右も左もわからない中はじめた国際協力が、国際交流の流れの中にうまく乗り、さらに広がっている。「国際協力」と聞くと「開発途上国支援でしょ？」と言われるが、決してそうではなく、「互恵」である。研修員の方達に来て頂くこと、開発途上国に赴くことで「元気」を頂き、こちらの「技術」も磨かれる。「情けは人のためならず」ではないが、まさに自らが元気になれる、そして自らが変わり、新しい自分になれるのが「国際交流」、「国際協力」という「ツール」(道具)ではないだろうか。地域文化として「国際交流」、「国際協力」に今後も前向きに取り組んでいきたい。